

愛・外傷・真実

翁長 直樹

子供のころより、私たちは数多くの写真を撮り、撮られ続けて大人になっていくのであるが、その中で、一枚でも自分の納得のいく写真があるだろうか。ほとんどの写真が、実際自分がイメージするものと、どこかずれていて、首をかしげつつも、「これが写真なのだ」と自らを説きふせつつやり過ぎていくといつものまにか、トランケー杯のスナップ写真が私たちの晩年の至福の一時を保障してくれる？わけである。

写真は不思議なメディアである。19世紀初期に生まれたこの練金術の申し子は、資本主義社会の急激な発展と歩調を同じくして、いやそれよりも速く、世界中を駆け巡っていった。

写真の発明者ニエプスは商売上の戦略を持たず、巧みな商人でもあるダゲールに歴史上の発明者としての名前も富も奪われてしまう。史上初の写真機はダゲレオタイプと名付けられ、発表の何年か後には世界の到るところに写真館ができたということである。

写真は肖像画の代りに受け入れられ、当初それだけが商売になった。当時のブルジョワジーが自分達の肖像を熱望していたからである。彼等は当時の社会の中で造り上げた地位や財産など、成功した自分の「肖像」を求めたのである。結局、写真は当初、絵画の持つ

ていた慣習を引きついでわけである。当時の肖像写真を見ていくと、ひとつの類型が浮び上ってくる。ブルジョワ社会を動かす神話的イメージなのであるが、それがどのようなものであるか、深く探ってみる価値はあるようだ。

さて、写真とその時代の神話的イメージはきわめて興味あるテーマではあるが、写真そのものの持つ不思議さについてもよくわからない。20世紀、現代になって、カメラの普及と共に誰でも写真がとれるようになり、冒頭に書いたように、私たちは数多くの写真を持つようになったが、写真についての疑問を置きざりにしたまま、通り過ぎてきたのではなからうか。いわゆる写真の「真実」とは何か、ということである。

ロランバルトは写真の事実性を徹底的に強調しつつ、しかし果して、写真は真実を伝えることができるか、考察するのであるが、結局、自分自身の中に深くおりにいて、愛と死の観点から写真の明証を探ることが問題となり、母の「真実」の写真を探すことになる。それは一枚だけ見つかるのであるが、他人にとっては数ある写真の中のひとつにしか見えない。つまりバルトにとって、母との愛（感情的志向性）が、彼の識知と結びついたときには、はじめて真実が訪れるのである。バルトにとって、写真は、心をかき乱すものをもたない限り存在しない。彼は写真を知的認識の対象としてではなく、心の傷のようなものとして扱おうとするのである。

さて、大城信吉は写真的真実を求めようと

シャッターを押し続けてきた写真家である。大城は身の回りの自分と関係するもののみを選んで撮りつづけてきた。今回展示される写真は、大城の「心の傷」のような映像である。少なくとも彼自身にとって、それは心をかき乱すものであるに違いない。大城自ら仕事の上で深くかかわり、生活空間を一変させることになった土地の人々と風景が、彼にとってどのような外傷であるか、写真は物語ってくれるであろうか。



■大城 信吉 プロフィール

1943 沖縄県中城村で出生
1974 12月中城村役場写真クラブ「びんぼけ」結成
1978 全日写連沖縄県支部入会
1981 島フォートグループ入会
1981 「びんぼけ」退部
1983 「イメージサークル沖縄」結成入会

中城村役場勤務

86企画—6 大城信吉写真展 — 浜から — 10月1日⑧—26日⑨(月曜休廊)

GALLERY TAKUMI



